

寺社Now

www.jisya-now.com

寺社の“いま”を伝える情報誌

vol.24



巻頭インタビュー

住吉大社 宮司

高井 道弘

特集

いざ!という時のために、どう動き出すべきか。

災害に備え、今、
寺社ができること

インタビュー

パンニャ・メッタ・サンガ会長、天台宗僧侶

サンガラトナ・法天・マナケ



02 巻頭インタビュー

住吉大社 宮司 高井道弘

信仰と文化が共に生きる歴史を受け止め
将来に伝えるために活動していく

08 新風

NEWS 1/ 貴重な史料をそろえた「北御堂ミュージアム」が誕生
NEWS 2/ 野鳥をモチーフにした「シマエナガみくじ」が評判に
NEWS 3/ 兵庫県尼崎市の街歩きツアー「プラグウジ」が人気

10 動静

NEWS 1/ 不明文化財情報提供サイトを文化庁が公開
NEWS 2/ 京都市が情報を集積・発信する「景観情報共有システム」スタート

11 未来考創

行政と寺社観光 奈良県知事／荒井正吾氏

12 特集

いざ!という時のために、どう動き出すべきか

災害に備え、 今、寺社ができること

14 東京都宗教連盟 新倉典生理事が語る
「首都防災×宗教施設 シンポジウム」から見てきた今後の展開

16 考察 1/ 寺社が地域づくりの一端を担う
真宗大谷派 光照寺(熊本県)

18 考察 2/ 行政と連携し、将来の避難場所に
高野山真言宗準別格本山 白水山平等寺

20 考察 3/ 寺社と地域を俯瞰しておく
平常時のうちに! 災害に備えるチェックシート

21 大阪大学大学院教授・東京都宗教連盟防災顧問 稲場圭信氏に聞く
社会が求めている寺社の可能性

伝統を未来へ～From the Past to the Future～

22 月替わりで御神酒を出す
姫嶋神社禰宜 鈴木伯季

23 日本で唯一の「寺専門」木魚を守る
有限会社市川木魚製作所三代目 市川幸造

うちのお宝

24 臨濟宗東福寺派 長寿山光通寺 石垣地蔵

25 御崎宮 張り子の干支

26 インタビュー

“何が必要か、私に何ができるか”から始めていく。

パンニャ・メッタ・サンガ会長、天台宗僧侶

サンガラトナ・法天・マナケ

30 テラハクレポート/宿坊 対馬西山寺(長崎県)

マンション



商業施設



賃貸住宅
「シャームゾン」



積水ハウスの 土地活用

オフィス



高齢者向け
住宅



クリニック



土地を活かす。地域が活きる。

土地活用とは、土地の価値を地域に活かすこと。積水ハウスは、住宅のリーディングカンパニーとして培ってきた総合力で土地の可能性を引き出してきました。入居者の多様なニーズに対応する賃貸住宅「シャームゾン」や高級感あふれる中高層マンション、時代が求める高齢者向け住宅など、地域貢献につながる土地活用を積水ハウスがご提案します。



積水ハウス株式会社 西日本特建支店

〒531-0076 大阪市北区大淀中1-1-93 梅田スカイビルガーデンシックス4F



土地活用に関するご質問やご相談についてもお気軽にどうぞ。

0120-131-470

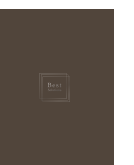
西日本特建支店

検索

資料をご希望の方は、フリーダイヤルでご請求ください。
ホームページからお申し込みいただけます。



積水ハウスの賃貸住宅
「シャームゾン」総合カタログ



積水ハウス西日本特建支店 実例集
「Best Solutions」

住吉大社 宮司

高井 道弘

たかい
みちひろ

■伊弉諾尊が禊祓を行った際に海中より出現した底筒男命、中筒男命、表筒男命、そして神功皇后を祀る住吉大社は、全国に2300社ある住吉神社の総本社であり、また摂津国一之宮として長い歴史の中で崇敬を集めてきました。

20年に一度行われる式年遷宮など、悠久の時の中でさまざまな伝統を継承してきた住吉大社の歴史はそのまま地域の歴史でもあります。同社では、神社のこれから、そして地域と共に歩む将来をどのように考えているのでしょうか。大阪府文化財センター評議員も務める高井道弘宮司に、現在の考えを伺いました。

住吉大社の象徴でもある反橋（そりばし）。水面に映る様子から太鼓橋とも呼ばれ、参拝者の記念撮影スポットとなっている



「御誕生所」という存在は地域にとって特別なもの

——平成23年に鎮座1800年を迎えられた住吉大社は、地域の方々から「すみよっさん」と親しまれています。社とその歴史を、人々が本当に大切に感じているようです。

当社は1800年ほど前に創立され、大変長い歴史を持っております。ご祭神の住吉三神は、古事記や日本書紀に記述があるように伊弉諾尊が禊祓をして海中から生まれ、お祓いを司る神様、海の神様というご神徳で知られてきました。日本は島国ですから、古代から海に対し篤い信仰があったのでしよう、三神はそれぞれ海の底、中、上を表す底筒

男命、中筒男命、表筒男命として信仰されてきています。

その信仰の広まりは、やはり遣隋使や遣唐使の歴史を抜きには語れません。当社は大阪湾に向かって立っており、かつてこの辺りはスミノエと呼ばれておりました。当時の住吉は大和朝廷の港で、遣隋使や遣唐使を派遣する際に朝廷が住吉の神様に航海の安全を祈願したのち、唐へ出航していたそうです。その頃はまた科学技術が発達しておりまして、航海は波まかせ風まかせで、まさに命がけ。しかし国家的な

高井 道弘

昭和14（1939）年生まれ。神宮皇學館神道教習科卒業後は靖国神社を経て昭和41（1966）年より住吉大社に奉職、平成25（2013）年から宮司。大阪府文化財センター評議員、神社本庁参与も務める。



信仰と文化が
共に生きる
歴史を受け止め
将来に伝えるために
活動していく



事業として20年に一度、唐からいろいろな文化を日本に持ち帰るといふ使命があったわけです。

このときは万葉集にも歌われております。当社の神楽の歌に「住吉に齋く祝が神言と行くとも来とも船は早けん」とありますが、これは住之江に神主がおり、その神主が遣唐使の出発に際して祈る。すると神様が行きも帰りも速やかに帰ってくるでしょうとおっしゃった、という内容です。遣唐使が渡唐に成功できたのは6割ほどだったと言われ、あとは南の島に漂着したり海の藻屑になってしまったそうですので、そのことを考えると、本当に切実な歌ですね。先人はそれだけ大変な思いをして、唐の文化を日本へ持

北前船は港で商いをしながら移動し、各地の寄港先には住吉様が祀ってありました。しかし現在、いずれの町も過疎化が進み、「かつて栄えた場所を昔のように活気ある町にしたい」と各市町村が願っていると聞いています。北前船が寄港していた町には往時の姿を残す場所も多いのですが、それを観光地化したいという思いもあり、平成19(2007)年に「北前船寄港地フォーラム」が立ち上がり、寄港地の観光資源活用が議論されています。また、「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間」北前船寄港地・船主集落」として多くの寄港地が日本遺産に認定され、平成29年5月には「住吉大社と境内の石灯笼群」が追加認定されました。当社には灯笼が600基以上ありますが、これらは非常に貴重な文化遺産で、北前船ゆかりの廻船業者が奉納したものが多く。しかも、すべて奉納主が違い、調べてみると全国から奉納されていることが分かりました。そこで当社も、北前船を題材にした地域振興に何らかの形で貢献していきたいと考えています。

日本は観光立国に向かってさまざまな施策を実行し、2025年には

島国に生きる海の文化。 その発展を考え、 神社の信仰につながる

ち帰ってきたのです。現在の日本文化の礎となった遣唐使船。その出発点が当社だとすると、感慨深いものがあります。

海を観光資源と考えて 住吉信仰も広めていく

——現在の日本へとつながる国家事業を住吉大社の神様が守っていたわけですね。社にまつわる航海の話という点、北前船とも深い関わりを持つておられます。

江戸時代の大阪は天下の台所として商売で発展し、それを支えていたのが北から日本海を回って大坂へ入る北前船と、大坂から江戸へ向かう菱垣廻船です。大坂を起点に海運が経済の大動脈だったんですね。

大阪万博も開催されます。先述の日本遺産では、かつては大阪が中心だったことも確認されました。しかし、日本は島国であるにもかかわらず、陸上のネットワークが中心の現代では、海のネットワークに対する認知が低い。だからこそ今後は海を観光資源にしようじゃないか、という壮大な計画も考えています。北前船の歴史、住吉信仰の歴史、そして当社の歴史。これらをうまく絡めながら、その活動が住吉信仰を広めていく手がかかりにもなれば、と思っています。

祭りをかつての姿に。 そのための大神輿復興

——歴史を紐解くことで信仰を考えることにつながっていくということですね。その過程では、次の世代へ歴史や文化をどう伝えるかも、大きな課題かと思われませんか。

全国的に災害が多発しています。東北では被災地で祭りをしたところ、そこで暮らしてきた人々が避難先から戻ってきた例がありました。ですからやはり、祭りを盛んにしなければなりません。祭りには先人が伝えてきたものが詰まっていますし、



左/住吉大社には第一から第四まで本宮があり、これらは大阪市内で唯一の国宝。右上・右下/南海電鉄南海本線住吉大社駅から続く参道には灯笼が並ぶ。これらは北前船が寄港した地域から寄進されたもの。中/御利益を求め、朝から参拝者が絶えない

神社の勤めとして 日々の活動を通して 文化を伝えていく



夏の大祭・住吉祭では、夏越祓神事・例大祭が行われたのち、翌日は大阪市と堺市を隔てる大和川を渡り、7km先の宿院頓宮まで「神輿渡御」が行われる。祭りには大人から子供まで地域の人々が参加する



上は毎年6月14日に開催される御田植神事。御田に設けられた舞台での田舞(八乙女舞)の神楽。ほかにも風流武者行事、住吉踊などが奉納される。右は御田で行われる昔ながらの田植えの風景。日本三大御田植祭の筆頭にも挙げられる重要な神事



祭りは地域の方々の拠り所で、年齢性別を問わず交流できる場です。当社には大神輿があり、かつては大阪府南部の堺市まで神輿を担いでいました。ところが車社会になり、神輿が練り歩くと車が通れなくなるという言葉、仕方なくトラックに乗せて運ぶということを数十年間続けてきました。しかし十数年前のこの、昔神輿を担いでいた地域の方々から、また神輿を担がせてほしいと申し出があったのです。それでまず中型の神輿を担ぐところから復興し、京都・祇園祭の担ぎ手たちにも手伝ってもらいながら、地域の体制を整えてきました。これを経て平成25(2013)年に大神輿の復活を決定、平成28年に完成しました。この出来事はまさに、地域の方々が神社を支えてくれている証だと感じています。祭りはやはり、人々の心をひとつに集めるのです。

地域からの協力を得て 祭りで文化を伝え続ける

「祭りがあれば地域も元気になり、ひとつになる。伝統を守り、地域と共に歩む取り組みはほかの神事でも見られると聞いています。」

と、神事で子供が学校を休むことを許可してくれるのです。つまり祭りが、地域ぐるみの協力体制で実現できているわけです。ですから祭りを続けることは、地域社会への貢献になると自負しています。

また、神事を行う神田は田植え前にレンゲ畑にして、地元の園児にレンゲ摘みしてもらっています。稲が育っている間にはカエルが鳴き、秋には子供たちがつくった案山子を立てる。さらに神事で残った苗は地域の学校に分け与えて、稲作を学ぶ食育プログラムを実施しています。祭りを続けていくには、やはり地域を大事にしなければいけません。

それに祭りは思い出になります。大人になり、地元を離れても故郷の大切な思い出として、記憶に残るはず。子供の頃にお世話になりました」と、時折遠方から参拝される方がいらつしゃいます。幼少期に楽しんだ祭りの記憶が、この行動につながっているのではないのでしょうか。

将棋には「着眼大局、着手小局」という言葉があります。大局的には全国的な住吉信仰を考えて広め、一方では地域が一体となる行事を大切にす小局も地道に取り組む。この姿

国の重要無形民俗文化財に指定されている当社の御田植神事も重要です。社の一角に、住宅に囲まれた20アールほどの田があります。伝説によると、神功皇后が朝鮮遠征から帰ってくる時に長門国から稲と植女を連れて住吉へ来て、米作りを始めたそうです。この話は西から稲作が伝播してきたことを表しているのですが、それを伝承していく行事が当社の御田植神事です。米作りは日本の文化ですから、その原点を昔の人と同じ手作業で守り続けていくのが目的です。ちなみに当社の御田植神事は劇場型、つまり見ていただく神事です。田の中央に舞台を設け、苗を植えながらさまざまな演者が登場し、その周りでは次々と舞や躍りといった芸能が練り広げられます。この神事には地域の子供たちが練習を重ねて奉仕しており、ご近所の方からは「何歳になったら出してくれるんや」と言われるほど密かな人気です(笑)。神事は毎年6月14日と決まっているのですが、奉仕のためには、学校を休まなければならない。ところがありがたいことに、地元の教育委員会では「地域の文化を守っていくのも一つの社会勉強」

勢を今後も継続していきたいと考えています。

近年は海外から来られる方も多くなり、全国的に見ても、華やかな観光が増えているように感じられます。しかし来日する方の中には美しい日本の、普段の暮らしを知りたいという理由で訪れ、できれば体験したい方もたくさんいます。

例えば当社で行われる結婚式の花嫁行列は、神社にとっては普段のことですが、外国の方は思わず拍手をしてしまうほど美しい風景です。つまり大切なのは、日本の姿をそのまま守り、普通の暮らしを粛々と続ける中で、伝統を次世代へつなげていくことではないでしょうか。



住吉大社
〒558-0045
大阪府大阪市住吉区住吉 2-9-89
TEL: 06-6672-0753
<http://www.sumiyoshitaisha.net>

新

NEW WIND

風

全国の寺社で、地域とのつながりを感じさせるプロジェクトが次々と生まれています。今回は仏教と町の関わりを学べるミュージアムのオープンや全国で話題のおみくじ、宮司が案内する街歩きをお届けします。



全長40メートルにもおよぶ歴史ガイドウォール(右)では、大阪の町の形成に影響をあたれた本願寺の歴史を詳しく解説。左上/本願寺が誕生した当時の大阪を知ることができるジオラマ(左上)も圧巻。

NEWS 1

商都・大阪の成り立ちを本願寺の歴史で知る 貴重な史料をそろえた 「北御堂ミュージアム」が誕生

■大阪市中央区にある浄土真宗本願寺派本願寺津村別院(通称・北御堂)の山門下一階に、本願寺と大阪の関わりを見て学べる「北御堂ミュージアム」が、平成31年1月9日にグランドオープンした。エントランスを入ると、まず壁面いっぱい歴史絵巻に圧倒される。順に見ていくだけで、多角的に大阪の歴史が理解できる点が大変興味深い。ほかに館内では北御堂ゆかりの歴史的史料の実物や大迫力の映像、詳細なパネル、津村別院再建模型などを用いて、本願寺と北御堂の歴史や事業、町との関わりを紹介。

この北御堂ミュージアムの開設は、貴重な史料で歴史をひも解くなかで、大阪の中心に生きた人々がかの抛り所としていた本願寺の全容を表現すると共に、浄土真宗の教えが、信仰だけでなく政治や経済、文化など当時の大阪で暮らしていた人々に多大な影響を与え、それが大阪商人の礎となったことを知ってもらおうのが狙い。また、多くの人が気軽に訪れることで、商都・大阪の成り立ちを知るだけでなく、浄土真宗とのつながりを深めてほしいという思いもあつてのこと。

ちなみに北御堂ミュージアムは、毎日10時から16時まで開館し、年中無休、入館料無料で見学できる点も大きな魅力。街の中心を南北に貫く御堂筋沿いであり、観光客が年々増加している大阪の新たな名所として、評判を呼びそうだ。



北御堂ミュージアム
〒541-0053
大阪府大阪市中央区本町 4-1-3
浄土真宗本願寺派
本願寺津村別院内
TEL:06-6261-6796

最新の学術研究に基づく、大坂本願寺と寺内町の1/1000縮尺復元模型は一見の価値あり。大坂本願寺景観再現図も展示されている



全長40メートルにもおよぶ歴史ガイドウォール(右)では、大阪の町の形成に影響をあたれた本願寺の歴史を詳しく解説。左上/本願寺が誕生した当時の大阪を知ることができるジオラマ(左上)も圧巻。



奉製にあたり、理想の形状を職人が再現できるようにと宮司自ら粘土でベースを製作。絵付けも職人の元へ出向て細かくチェックした

■札幌神社(現北海道神宮)の分霊を祀る帯廣神社は、約7000坪にも及ぶ緑豊かな境内地を持つ。その鎮守の杜は、秋から春にかけて週に一度ほどのペースで雪の妖精とも呼ばれる野鳥・シマエナガが飛来することでも知られているが、平成30年11月にシマエナガの姿をモチーフにしたおみくじの頒布を始めたところ、そのかわいらしさでたちまち全国区の人気となった。

シマエナガは、北海道にしか生息していないエナガという鳥の亜種で、首をかしげる仕草がチャームポイント。その姿の表現に徹底的にこだわって奉製されたおみくじは、SNSを通じて多くの人々の目に留まり、おみくじをいたただくために神社と帯廣の街へ行きたいという人、郵送で注文できないかと問い合わせる人も出るほどの盛り上がりを見せている。

そもそも、神社の大切な自然に

も目を向けてほしいと宮司が境内の風景や飛来する野鳥の写真を撮りためて小冊子にまとめる過程で、シマエナガの姿に一目惚れしたのがきっかけ。それをおみくじにしようとして手したが、あまりの人気で初回分は1月で授与が終了。現在追加で奉製中だという。

また、シマエナガみくじ効果で神社の認知も急速に広がり、SNSの閲覧数もこれまでにないほど増加。雪解けを待ち、多くの人が帯廣の街と帯廣神社を訪れることになるだろう。

NEWS 2

あまりのかわいさに全国から注文殺到! 野鳥をモチーフにした 「シマエナガみくじ」が評判に

帯廣神社
〒080-0803
北海道帯広市東3条南2-1
TEL:0155-23-3955
http://www.obihirojinja.jp

NEWS 3

宮司が街の案内役として大活躍 兵庫県尼崎市の街歩きツアー 「ブラグウジ」が人気



歩くエリアごとにテーマを決め、参加者が街の隠れた歴史に気付いて尼崎を好きになってもらえるよう、さまざまな話題を毎回用意する

■天守閣が完成し、本年3月29日から一般公開が始まる尼崎城のある兵庫県尼崎市で、昨年からはまった街歩きツアーが評判となっている。その名も「ブラグウジ」。市役所シティプロモーション事業担当が企画したこのツアーは、市内の交流人口の増加を目的に実施している「あまらぶ体験隊」の一環として開催されているもの。同市にある貴布禰神社の江田政亮宮司が案内役として登場し、尼崎市地域研究資料館館長と共に街を歩きながら、歴史や街の秘密などを解説していく。

全国各地で街歩きツアーは開催されているが、多くは参加者が高齢、説明だけで終わるために盛り上がり

ツアーの参加者募集ちらしにはタモリ風の江田宮司の姿があり、評判がいい

ちなみに参加者は抽選で選ばれ、ツアーの様子をSNSなどで情報発信することがルール。すでに話題となっており、回を増すごとに、尼崎市だけでなく、貴布禰神社の認知も、全国的に広がっていきそうだ。

動

NEW WIND

静

寺社が知っておきたい施策など、行政を中心にした動きをご紹介します。今回は近年問題となっている盗難文化財に関する文化庁の取り組みと、観光と文化財保全を兼ねた京都市の情報共有システムです。

NEWS 1

所在不明文化財発見につながる取り組み 情報提供特設サイトを 文化庁が公開

■文化庁は所在不明の文化財について広く情報提供を呼びかけ、発見につながるよう、盗難を含む対象文化財の画像やサイズなど詳細も記載した特設サイトを2月1日に公開した。同庁では平成25年から26年に、全国指定文化財について都道府県教育委員会を通じて現物確認を原則とした所在確認を進めてきた。その結果、平成29年末現在で所在不明161



各所在不明文化財は、名称や員数、サイズ、材質に加えその他の特徴も記載されている

件、追加で確認が必要なものが51件あり、これらの早期発見と盗難抑止のため、今回の情報発信となった。文化財の中には、所有者の転居や相続に関連して所在がわからなくなっているものや、古美術商やオークションサイトなどから入手したものの、由来を知らずに所有されているものもある。過去には有識者や美術館学芸員、古美術商からの情報提供で所在が確認できた事例があるため、今回詳細情報を公開することで、所在不明文化財のさらなる発見が期待される。今回は国指定文化財を公開、4月1日には自治体指定の文化財に加え、未指定文化財も同サイトに情報を追加していく予定。発見された文化財は、最終的に元の持ち主へ戻すことが狙い。

【文化庁/盗難を含む所在不明に関する情報提供について～取り戻そう!みんなの文化財～】<http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/tounan/index.html>

NEWS 2

景観を構成する主体が情報共有する取り組み 京都市が情報を集積・発信する 「景観情報共有システム」スタート

■京都市では、都市計画規制や文化財などの情報に加え、街の成り立ちといった情報も集積させた「景観情報共有システム」を平成30年10月に公開した。京都市は言わずと知れた歴史の資産の宝庫。建造物や文化財などよって、現在でも歴史を感じられる景観が世界的観光地となっており、景観の保全のためには、市民や事業者など景観の構成主体による、景観に対する意識や価値観の共有、また一体となった取り組みが必要とされる。そこで本サイトの公開となった。システムを利用すれば、観光客や市民は、景観を構成している建物や文化財を検索し、それらを表示する地図は明治・大正・昭和にそれぞれ作成された過去の都市計画基本図と並列表示でき、街並みを比べることができる。

また、歴史や観光分野の研究はもちろん、寺社など歴史的資産の所有者にとつては、用途地域や高度地区、景観保全といった規制情報も地域を絞って調べられるため、今後の施策に大いに活用できそう。現在準備中だが、閲覧者が「守っていききたい」と思うおすすめの景観を投稿できるページもある。公開されれば、隠れた魅力発掘につながることを期待される。



特設サイトでは、システムを利用できるほか、京都市の景観政策や地域景観づくり協議会の情報、建物の保全などに関する支援情報も掲載されている

景観情報共有システムでは、住所や最寄り駅名、名称で歴史的資産を検索できる

【京都市景観情報共有システム】<https://keikan-gis.city.kyoto.lg.jp/keikan>

《日本の明日を寺社と共に。》

未来考創

寺社をテーマにした観光について
未来志向で取り組む人を訪ね、
日本の未来を共に考え、創造します。

第1回

行政と寺社観光

奈良県知事／荒井正吾氏

行政が周辺環境を整備し、寺社が情操に訴えるコンテンツを提供する。このタッグで観光を経験として記憶に残し、再訪を促していきたい。

廣瀬 寺社をきっかけにした文化振興のあり方・進め方について、荒井知事はどのようにお考えでしょうか。

荒井 奈良県が寺社と共存共生していくためのポリシーは、寺社の周りに賑わいを作り、集客を考える。そして集まった人に「ついで参り」を促すことです。平成遷都1300年祭では、無料のイベントをいくつも開催しました。すると県内の寺社は参拝者が増加、中には4倍に増えたところもありました。これは、例えばお寺が花を飾り、見に来た人が鑑賞後にお寺へ参拝するという、昔からあるビジネスモデルと同じです。今後もあるべく県が無料のイベントを開催し、奈良には素晴らしい寺社があります、と伝えていきたいと思っています。音楽関連のイベントも開催していく予定ですが、イベントの際、近隣寺院で実施される説法などを案内するようなども進めたいですね。寺社にはお願いができないとお参りできない、と思

われる方が多いようですが、そうではありません。イベントなどアトラクションを楽しんで、「こんなに楽しい思いをさせてもらった」という感謝のお参りでもいいのではないのでしょうか。それから、日本の寺社は山の麓にあることが多いものです。海から見たものを山の麓に祀ってきた、これは島国日本独特のメンタリテイです。その文化を体験してもらおうとすると、インフラの改善も考えないといいけません。アクセスの整備はもちろん、例えば、吉野山の桜をロープウェイから見ただけではなく、山にリフトを設置して桜の中を通ってもらうとか、ジップラインで桜の間を下ってもらうような、いろいろなアイデアがあります。こういうことができる若者が金峯山寺を訪れるようになりまます。この「ついで参り」のコンセプトで、寺社の魅力を若い世代に伝えていきたいと考えています。



聞き手／廣瀬崇之
一般社団法人全日本
社寺観光連盟理事。元
内閣府特命担当大臣
秘書官、文化観光リ
サーチ株式会社代表

のように考えておられますか。
荒井 外国人には空間そのものを文化財として、丸ごと感じていただきたいと考えています。奈良観光で「何がよかったのか」という思い出、つまりエピソードを大切にしています。訪れた場所でのエピソードは経験になります。観光の目的として、訪れて思い出に残る経験をしてもらう。日本はコト消費のバリエーションを増やす必要があります。寺社観光もコト消費ですし、文化財でのコト消費はエピソードになるはず。後、奈良県の寺社が担っていくべき役割とは何でしょうか。
荒井 我々行政は寺社の周りでイベントを開催し、彩りのある景観を、地域政策としての環境整備で進めていきたいと考えています。これは日本のメンタリテイの良いところを伝えていくためです。その上で、寺社には情報部分を担っていただきたい。それが奈良県知事として考える寺社振興です。

災害に備え、 今、寺社ができること

いざ!という
時のために
どう動き出すべきか

地震や水害など、近年多発する大規模災害によって、人々の価値観が大きく変容している平成の終わり。災害のたびに防災・減災、そして支援の在り方について議論が起こるが、そこで寺社への期待が高まっている。「災害はいつ、どこで起こるか分からない」という認識が広まっている今こそ、寺社が社会に果たせる役割を考え、そのための備えに動きたい。

寺社が持つ公共性と癒し。 その強みで災害に備える

日本は遥か昔から、たび重なる災害に見舞われてきた。古文書を見ると、みると、地震、台風、火山の噴火など、実に多くが記されている。そして現代。阪神淡路大震災の起こった平成7(1995)年からは地球規模で異常気象が起こり、また大規模災害も増えている。激甚災害法の指定を受けたものだけでも、過去5年間で実に27件。もはや日本は「常に災害に備えるべき国」という認識が一

般的になった。

このような認識が広がる中で注目されているのは防災・減災の在り方。特に災害への備えについて平成の30年間で最も変化したのは、人的、地域的な備えが強く叫ばれるようになったことだろう。阪神淡路大震災は「ボランティア元年」とも呼ばれ、これ以降、災害時には多くの人が復旧・復興に尽力するようになった。同時に、寺社への期待も高まってきている。

寺社は歴史的に見ると、どの地域でもパブリックスペースと同等に考えられてきた。人口が増え、無数の建物が街を覆うようになった現代においては、ある程度の敷地を確保でき、かつ人々が安心して集まれる場所、何より災害時に疲れた人の心を癒してくれる存在として、その重要性が再認識され始めているように思われる。

こうした社会背景の中、平成30年

12月に、東京

都宗教連盟と東京都との防災担当による初めてのシンポジウム「首都防災×宗教施設シンポジウム」が開催された。本シンポジウムは、もはや行政だけでは太刀打ちできなくなっている災害時の対応について、寺社との連携を探るきっかけとなりうる。さらに今後は行政と寺社、そして企業などの民間組織がタッグを組み、災害に備えていく流れにつながっていく可能性も感じられる。



寺社が社会のために何ができるのか。いざというときののために今から何をすべきか、考え、ただちに動く時期にきている。

避難所として寺社が機能するには

阪神淡路大震災、東日本大震災、そして熊本地震の3つの大規模災害を振り返ってみると、被災地にある寺社に多くの人が避難してきた例が見られた。都会では帰宅困難者を受け入れ、地方では避難所まで行けない高齢者などが身を寄せたのだ。しかし多くの人がいるにもかかわらず、支援物資が届かないという事例も報告されている。理由の多

くは、そこが行政からの避難所指定を受けていなかったからだ。このような反省を踏まえて今、行政から寺社への働きかけが起こり、またその逆の動きとして自分の施設を避難所登録しようと行政との協議を進める寺社も増えてきている。この動きは今後も増えると考えられるが、そのためには自施設の状況を正確に把握しておくことが必要だ(20頁参照)。



首都防災×宗教施設 シンポジウム

から見えてきた
今後の展開

平成30年に東京都宗教連盟が実施主体となり、「東京都内宗教施設における平常時・災害時の受入体制調査」が実施された。その結果を踏まえ、さらなる議論を進めていくために開催されたのが「首都防災×宗教施設 シンポジウム」だった。その議論から見えてきた、寺社が今後、社会に向けて成すべきこととは何なのか。東京都宗教連盟の新倉典生理事に話を聞いた。

地域の人々のために 大震災時の反省を活かす

平成7年に発生した阪神淡路大震災の折、多くの宗教者が現地へ行って被災者の力になりたいと感じていたはず。しかし、あの頃はまだ、ボランティア活動が宗教者の大切な役割であるという意識は低く、被災地において宗教者や宗教施設の力を十分支援に活かすことができませんでした。

震災後、東京都宗教連盟では「災害時に宗教者は何を期待され、どんな役割があったのか」を、阪神淡路大震災に遭遇された宗教者の方の講演などを通して検証し、今後の首都防災に活かすという動きが始まりました。

した。あの震災を対岸の火事のようには捉えてはいけいない、犠牲になられた方々に報いるためにも、宗教者がどう備えるべきか考える必要性を感じていたからです。

そして東日本大震災が発生しました。私は東京都仏教連合会の事務局長として被災地の情報を集め、同時にボランティアとのネットワークづくり、現地仏教会との連絡網づくりをしました。被災地からの情報を都内の宗教者に伝え、共有することで、さまざまな協力ができましたし、宗

派を超えた多くの僧侶が現地へ向かい、支援活動に参加することができました。この2つの大規模災害を経験して我々が感じたのは、行政と宗教者が協力できている所とそうでない所、さまざまな協力ができましたし、宗



日蓮宗善立寺住職、東京都宗教連盟理事の新倉典生師。「寺社が地域社会との関係を深め、期待される存在になっていくためには、意識改革が必要だと感じています。それこそが防災へつながり、寺社の未来を創りあげるはず」と言う

い所では、被災者の方々の支援活動や避難生活に大きな違いが出てくることでした。地域の中心にある宗教施設で事前に行政と災害時協力の連携ができていれば、そこには物資が

届き、行政に避難者の情報を届けることもできたはず。東日本大震災でも、地域の人々にとっては公共的な存在である寺社を、事前の準備不足によって活かすことができなかった事例が多々

あったのです。この教訓は早く活かさなければならぬ、そこから東京都宗教連盟では、東京都の防災担当との連絡を取り始めました。

宗教者がひとつになれば 行政との連携が進む

協力体制を行政と模索するにあたり、最初に立ち上がった壁は、宗教に対する距離感でした。例えば私は仏教者ですが、東京都の仏教会と

「東京都内宗教施設における平常時・災害時の受入体制調査」では、建物の耐震性、帰宅困難者の受け入れ可否、備蓄食料の有無など防災の観点に加え、平常時の体験プログラム実施状況、飲食や宿泊設備の有無など、平常時の人々との関わりについても項目が設けられた

してでは、行政は宗教のひとつとして捉えてくれないため議論になりました。こちらは公的な話のつもりでも、行政には一宗教に力を貸すようなイメージなのです。そこで神道もキリスト教も新宗教も協力し合い、宗教連盟として働きかけ、連携の模索がスタートしました。

東京都内には約5800の宗教施設があります。災害時にこれらの施設をどう活用するかと考えた時、人口が密集している都心部ではまず、各施設で一時帰宅困難者を受け入れるという点になります。話し合いを始めた当初、東京都各地域の防災マップにはほとんど一時避難場所として宗教施設が載っていませんでした。その事実を知り、行政と宗教者との間で事前の協力体制構築が必要であるとの考えを伝え続け、平成29

年に都知事から「東京の防災に関して宗教施設を活用したい」と声がかかりました。これは宗教の持つ力、宗教施設が持つスペースを災害時に有効活用することが、都民の被害を減少させることにつながる、という判断からでした。もちろん、災害時の備蓄や被災者に対する心のケアと

いった面での期待感もありました。

行政からの期待は地域社会からの期待の声と同じです。これまで私たち宗教者は、教義を広めることを中心に考えてきました。しかし度重なる災害を経た今、広い意味での社会貢献に宗教者の参加が求められているのです。宗教者とは、人に寄りそ

う役割を持つています。その原点に立ち返り、日常的に地域社会とのつながりを強め、住民のリクエストに応えていく。それが防災につながっていくのではないのでしょうか。

防災に取り組むことは 地域社会と結びつくこと

東京はオリンピックが控えていますし、全国的には海外からの来訪者による観光需要が高まっています。そのような中で寺社は、災害に備え

た施設の検証、文化財や祭りを通じて地域とどうつながりを持つのか考える必要があります。ですから今回の調査では、災害時だけでなく平常時の状況も同時に聞きました。これからは寺社が自分たちのことを広く発信していく時代です。そうすることで多くの方との結びつきが生まれ、その結びつきが防災にもつながっていきます。

また現代は、たくさんの方々が寺社に安心感を求め始めているようにも感じています。地域社会を含め、人と関わることから、寺社のこれからのニーズが見えてくるはず。観光も防災も、人々を分け隔てなく受け入れることに変わりはありません。寄り添うという役割をどのような場面に生かしていくのかを考えることが、急務だと思っています。

寄り添うことに
今一度立ち返り「事前に」
何をすべきか考える時。

考察

1

■ 真宗大谷派 光照寺〈熊本県宇城市〉

寺社が地域づくりの一端を担う

地域の拠り所となっている地方の寺社は、人々を元気にするだけでなく地域づくりも担える。熊本地震での事例から、その可能性を考える。

東日本大震災時に学んだ「祭り人は人を元気にする」

平成28年4月に起こった熊本地震では、熊本県中南部にある宇城市豊野町も大きな被害を受けた。本震で多くの町民が避難したあとも余震が続き、町の人たちは完全に疲弊していた。その状況を見て「祭りをやらなければ」と決意したのが、400年あまり続く真宗大谷派 光照寺の糸山公照副住職だ。糸山氏は東日本大震災に際して現地へ赴き、ボランティアに従事した経験を持つ。現

地で見たのは「祭りが開催されて、参加した地域の人たちがみるみる笑顔になっていく」姿だった。「その時感じたのは、震災が起こる前に地域の人のつながりをしっかり作っていたら被害を減らせたかもしれない、ということ。その思いをまだ行動にできていない時に、熊本地震が起こり、私も被災者となりました。当事者となり気付いたのは、次に来るかも知れない災害に向けて人のつながりを作っていかなければ、ということでした」

地震発生以降、熊本県内各地では祭りが中止になり、また祭り開催への自粛ムードもあつた。しかし、人々が不安な暮らしを余儀なくされている今だからこそ祭りを開催しなければと糸山氏は感じ、「復興夏祭り」を企画。すると200人近い人が集まり、笑って元気になった。

町のみんなが参加できる祭りだからこそ意義がある

この結果を受けて、秋には豊野町が主体となって秋祭りが開催されることに。震災から一年を迎える翌4月には、復興の集いも開催された。「祭りを開催すれば、バラバラになっていた地域の人たちが集まれます。その場で安否確認もできるし、何よりみんな元気になる」と糸山氏。しかし復興の集いは、自身主催のものとは別に必要性があった。

「復興の集いで、慰霊祭をやろうと考えました。しかし私の寺が主催すると、宗派の違う方などに参加してもらえません。豊野のような田舎町では、町内の寺社が集まる催しは町の行事と同じ意味を持ちます。だから



光照寺では震災前からそうめん流しなどを開催してきており、祭りを開催することへの抵抗はなかった。寺を会場にした「復興夏祭り」では、サプライズでくまモンも登場。集まった人たちの喜びもひとしおだった



糸山氏は祭りを開催する前から震災後の避難所巡りをしている。現在でも毎週欠かさず訪問し、高齢者の話に耳を傾ける

ら宗派、寺社関係なく町内の宗教者が合同で合同慰霊祭を行いました。町の宗教者がそろってやることで、一宗派の宗教行事ではなく、町営の施設を使うことができるというメリットもあります」

かくして復興の集いを開催したのだが、ふと糸山氏は考えた。「復興と名が付くと、避難した人、仮設住宅で暮らす人が参加する行事だと思われ人もいる。それでは町全体の元気にはつながらないのではないか。やはり祭りにするしかない」。こうして震災から二年後は、復興祭として開催。参加者はかなり増えた。

地域の人をつなぐことが宗教者としての役割

豊野町では、地震に際して行政の人員が不足し、全体の状況がなかなかつかめずという。そんなと



光照寺では本尊が破損、本堂もいまだ再建できていない。本尊は現状での展示を計画、寺院横の丘に「祈りの杜」を創り、そこに安置することも計画している



きだからこそ役に立つのが、地域の宗教者だと糸山氏は言う。「寺の人、神社の人、というように田舎ですつかり顔を覚えられています。だから避難所にもどんどん入って行って町の人の安否確認ができるんです。それに、避難を嫌がる高齢者でも、まああちゃん、来たよ、避難するよ」と言えば、なんとか動いてくれる。これが行政関係者だったら、動いてくれなかったかも知れません。宗教者は心に寄り添うのが役割ですし、人の生死に関わっています。だからこそ皆さんが私たちの言葉に耳を傾けてくれる。祭りもこれと同じで、地域の宗教者が声をかければ、町がひとつにまとまるのです」。地域の

宗教施設がひとつになり祭りで地域の人をつなぐ

人に寄りそう宗教者だからこそ、バラバラになった地域の人たちをまとめることもできるというわけだ。避難所にもなり、心のケアも担当、そして元気にもしていく。災害時における寺社の役割とは「地域の人を行動でも心でもつないであげること、そのための橋渡し役」だと糸山氏。

人の集まりができたなら祭りは次のステップへ

平成31年4月で熊本地震から丸3年。もちろん糸山氏たちは祭りを企画しているが、今回は形が少し違う。「震災から3年経ちます。町はまだ元の姿に戻っていませんが、全国で災害が発生している状況の中、復興だけ叫んでいるわけにはいきません。防災・減災にシフトし、町の人に備えることを覚えていってもらわなければ」今年の4月13日に開催されるのは



豊野町公民館で開催された復興の集いでは、最初に町内全寺社出席のもと、合同復興祈願と追悼法要が行われた。



真宗大谷派 光照寺

〒861-4301
熊本県宇城市豊野町糸石 2249
TEL : 0964-45-2194
http://rs.officere.com/koshoji

考察
2

高野山真言派 白水山 医王院平等寺〈徳島県阿南市〉

行政と連携し、 将来の避難場所に

平常時は宿坊として、災害時は避難所として。有事に備えて運用に慣れておく、新しい宿坊の形



毎日全国各地からお遍路が訪れる。四国八十八ヶ所と霊場は世界遺産登録を目標にしているため、登録されれば外国人の参拝者が急増することも予想される。宿泊場所の整備は町としても重要課題

有事の際を前提にした
目的特化の宿坊が誕生

寺社を取り巻く現状の中で、とりわけ宿坊事業が活発化している。住宅宿泊事業法(民泊新法)の施行も追い風となっているわけだが、徳島県阿南市新野町に平成29年、それらは趣を異にする宿が誕生した。

四国八十八ヶ所霊場第22番札所平等寺に誕生した「坊主の宿」は、全国初のシームレス(つなぎ目のない)民泊の宿だ。シームレス民泊とは徳

お寺が災害対応の 宿坊を始めれば 地域の防災意識も高まる

島県規制改革会議で提唱された徳島県独自の民泊制度のことで、普段は遍路宿として民泊事業を運営し、大規模災害発生時には一般避難所に

写真左より「新野シームレス民泊推進協議会」会長として、自身もシームレス民泊の宿をオープンさせる西川達也さん、平等寺の谷口真梁副住職、協議会で防災を担当する防災士の青木正繁さん。民泊には庫裏の和室を活用する



入れない要介護者を受け入れる避難所になる。民泊新法での民泊は年間営業日が180日に制限されるが、シームレス民泊は徳島県の規制緩和により旅館業法での簡易宿所となるため、営業日数に制限がないのも特徴だ。要介護者とは高齢者や妊婦のこと、そこに外国人も対象として想定している。平等寺は40年ほど前まで、お遍路を受け入れる大規模な宿坊を運営していた。しかし施設の建て替えなど諸事情のため休止、近年の遍路入口増加を受けて小規模ながらも復活を考えていたところにシームレス民泊のを知り、登録による再開を決意した。

「普段から遍路宿として運営に慣れておけば、有事の際に慌てずに済みます。また避難所として登録してお

じめ現在3軒がスタートし、4軒目もほどなく運営を始めます。この事業に認定された避難所が町に点在することで、有事の際には要介護者の受け入れを振り分けることができ。これは防災の観点からとても重要なことです」とのこと。また、第1号が寺院であることも、町にとつては大きなことだと言う。

「防災へ向けた取り組みをお寺が始めた」と聞くと、町の人の防災意識は間違いなく高まります。新野町のよな地方の町では、お寺に対する信頼感が強い。しかも八十八ヶ所霊場のひとつですから、そこが防災へ取り組みを始めたとなると、この活動はちゃんとされているものだと町の人に理解してもらえます」と谷口副住職。防災は地域全体で取り組むべきこと、そのために寺院が先導的役割

として取り組みを始めた、というのがシームレス民泊の根底にあった。災害に備えなければという意識はあっても、どこまでやればいいのか、町の人にはわからないもの。そこで寺院が参加したとなれば「お寺さんがここまで取り組んでいるのだから、私たちも協力していこう」という機運が高まるのではないか。

ちなみに新野シームレス民泊推進協議会には宿泊と防災という2部会があり、年に一度防災訓練も実施している。地元特産の竹を使ったテントや担架づくりなどを、自衛隊や徳島県危機管理部も交え、地域の人たちと一緒にやっているのだ。

町ぐるみの取り組みに 発展させ、次の目標へ

このように、町の防災意識が高まることで、個人レベルでも「うちは災害時に要介護者を受け入れられる」という住民が出てくる環境を醸成していきたい。平等寺をはじめ、シームレス民泊に携わる人の心には、そのような思いがあった。こうして町ぐるみで宿泊施設兼災害対応避難所運営という動きが生まれれば、災害

に強い町、災害時に地域の結びつきが強い町、という新たな価値を生み出すことにもつながっていくのではないだろうか。さらに、その先へも進めると西川氏、谷口副住職も口をそろえる。「新野町には平等寺という札所があるにも関わらず、宿泊施設が不足しています。今回平等寺が宿坊を復活させたことは、お遍路をされる方々に大変喜ばれました。シームレス民泊をきっかけに町内に宿泊施設が増えれば、それが交流人口の増加にもつながっていくかもしれません。次の目標はそこにあります」

有事を想定して平常時から宿泊になれておく。その動きを地域活性化につなげたい。防災も観光も、地域を元気にする取り組みだ。その先頭を寺院が走る意義は大きい。

お寺が行動することで 地域への好影響を期待

ちなみに平等寺の宿泊定員は8名。避難所と考えると少ない気がするが、そこはシームレス民泊事業の展開を考えてのことだった。取材に同席してくれた新野シームレス民泊推進協議会西川達也会長によると、「シームレス民泊として平等寺をは



新野町は阿南市の内陸部にあり、南海トラフ発生時には避難所機能が行政からも期待されている



高野山真言宗
準別格本山 白水山平等寺
〒779-1510
徳島県阿南市新野町秋山177
TEL: 0884-36-3522
https://www.byodoji.jp



大阪大学吹田キャンパスの設置された独立電源通信網「みまもりロボくんⅢ」。(一社)全国自治会活動支援ネットワークの発案で、NTN社が筐体を提供し、稲場教授の研究グループが共同で開発を進めている

大阪大学吹田キャンパスの設置された独立電源通信網「みまもりロボくんⅢ」。(一社)全国自治会活動支援ネットワークの発案で、NTN社が筐体を提供し、稲場教授の研究グループが共同で開発を進めている

大阪大学吹田キャンパスの設置された独立電源通信網「みまもりロボくんⅢ」。(一社)全国自治会活動支援ネットワークの発案で、NTN社が筐体を提供し、稲場教授の研究グループが共同で開発を進めている

大阪大学吹田キャンパスの設置された独立電源通信網「みまもりロボくんⅢ」。(一社)全国自治会活動支援ネットワークの発案で、NTN社が筐体を提供し、稲場教授の研究グループが共同で開発を進めている

寺社の可能性を 社会が求めています

大阪大学大学院教授・
東京都宗教連盟防災顧問
稲場圭信氏に聞く

寺社のこれからの 災害対応は不可欠

これだけ災害が頻発し、さまざまな立場の人、企業、団体による社会的貢献が問われている時代で、寺社は苦難に寄り添う立場としてどうするのか、寺社のスペースを災害時に活用できないのか、という声が挙がっています。もちろん寺社はその声に応答していく必要があり、供養、慰霊に加えて場所としての貢献も求め

られていると言えます。



宗教者災害支援連絡会の世話人も務める稲場教授。宗教の社会貢献、利他主義、防災と宗教などを研究。宗教社会学博士、防災士。「未来共生災害救援マップ」の運営もしている

東日本大震災後、全国で地区・地域防災計画の見直しが行われてきました。その中で分かってきたのは、明らかに避難所やスペースが足りない、このままでは地域の人だけでなく観光や出張で訪れている人などを助けることができないということでした。そこで受け入れ場所を行政は各所へ打診するのですが、企業のオフィスやタワーマンションなどには断られてしまう。その過程で、寺社に協力してもらえないかという期待が高まってきました。実は昭和40年代以前、寺社の多くは地域の指定避難所でしたが、いつしか忘れられてしまいました。しかし現在、地域のつながりを取り戻す活動が活発化している社会で、寺社に対して今一度開かれた場所となつてほしいというのが時代の要請です。

東京都宗教連盟が行った調査では、回答した寺社のうち49%が災害時に協力する意向があることがわかりました。にもかかわらず、すでに行政との協定を結んでいる、災害時の避難場所として指定されているのはわずか4%。このギャップを埋めていく必要があります。東京都では寺社に働きかけていかないと、もう避難できる場所を確保できません。今回の調査では、十分な耐震がある建物を持つ寺社が全体の1/3もありました。この事実を知った東京都は、さっそく連携に向けての計画を立てることでしよう。

大災害時は、避難所指定されているかどうかを問わず、人は近くにある安全な(と思える)場所に逃げていきます。その時、避難所指定を受けていない、耐震設備が整っていないからと寺社が門を閉ざしてしまつては、その後地域で生きていくことはできないでしょう。しかし、だからといって住職一人のお寺が無理して避難所運営をする必要はありません。逃げてきた人によつてもらえたいのです。そのためにも日頃から地域と話し合つておくことが大事になります。災害時でも立ち入って困る場所を知らせる、炊き出しができる空き地を確認するなど、多くのことを話し合つておくのです。それだけで災害時の対応が大きく違ってきます。何ができて何ができないのかを事前に決めておけば、協力体制が組めるのです。

もちろん、何を話し合つたらいいのかさえわからない寺社は多いと思います。だからこそ宗派や教区などでワークショップを行うなどの活動が今後広がっていくと考えられます。防災マニュアル作りも進んでいきますので、ぜひそのような場や制作物を活用してください。

その上で、地域の人と知識を共有できる機会を設けるのもいいでしょう。すると防災への取り組みが地域活性化にもつながっていきます。防災は少し進めればどんだん人の輪が広がっていくものです。

考察 3

寺社と地域を俯瞰しておく

寺社は社会にとって公的空間に準じる場所。となると災害時には、多くの人々が避難してくることも想定される。その時になって慌てないためにも、日頃から自分たちの寺社の状況を正確に把握しておきたい。併せて、地域にある設備や機能を知っておくことも大切だ。

平常時のうちに!

災害に備えるチェックシート

チェック1 近隣住民や通りがかりの人が避難してきた際、受け入れは可能か?

1 耐震の建物はあるか?	<input type="checkbox"/> ある <input type="checkbox"/> ない → 近隣の避難所へ誘導しよう
2 屋内に、避難者を受け入れられる場所はあるか?	<input type="checkbox"/> ある → 3へ <input type="checkbox"/> ない → 同上
3 避難者を受け入れられるスペースは何m ² くらい?	() m ² ※2~3m ² に1名計算で受入可能な人数を把握しておこう → () 人程度受け入れ可能)
4 生活用水に利用できる井戸はあるか?	<input type="checkbox"/> ある(電動/手動) <input type="checkbox"/> ない → 一定程度の備蓄を推奨
5 避難してきた人に配布できる飲料水(*1)はあるか?	<input type="checkbox"/> ある(のべ)人分) <input type="checkbox"/> ない → 近隣の避難所と連携し、確保の方法をあらかじめ自治体と相談しておこう
6 外国人が避難してきた。言語対応できる職員はいるか?	<input type="checkbox"/> いる <input type="checkbox"/> いない → 自治体の観光課から、指差し会話シートをもらっておこう
7 夜間に停電した場所の明かりは確保できるか?	<input type="checkbox"/> 非常用電源がある <input type="checkbox"/> 非常用電源はない ⇒ 電池式・手回し式の懐中電灯を多めに準備しておこう

*1 飲料水は1人1日2ℓを目安としてください

チェック2 自分たちでは避難者の受け入れが難しい。地域とどのように連携できるか?

8 徒歩10分以内に指定避難場所や避難所があるか?	<input type="checkbox"/> ある → 職員を派遣することによる地域サポートの方法を検討しよう <input type="checkbox"/> ない → 実効性のある避難場所を自治体と調整しておこう
9 自分の寺社の職員と緊急時にすぐ連絡がとれるか?	<input type="checkbox"/> とれる <input type="checkbox"/> わからない → 連絡手段を決めておこう
10 檀信徒、氏子、自治会などと災害時の協力体制を決めているか?	<input type="checkbox"/> 決めている <input type="checkbox"/> 決めていない → 話し合いで役割を決めておこう
11 駐車場や広場などが施設内にあるか?	<input type="checkbox"/> ある → スペースの活用方法を自治体と調整しよう(備蓄基地、ボランティアデスクなど) <input type="checkbox"/> ない → 近隣の避難所へ誘導しよう
12 自治会や市の防災課など、関係機関の連絡網があるか?	<input type="checkbox"/> ある <input type="checkbox"/> ない → 非常時に繋がる緊急連絡先を準備し、関係者間で共有しておこう
13 自分の寺社付近の危険箇所(*2)を知っているか?	<input type="checkbox"/> 職員全員が知っている <input type="checkbox"/> 知らない・職員全員は知らない → 周辺地域や避難所までのルートを確認し、危険な箇所をマップに落とし込んでおこう

*2 浸水しそうな低い場所、古い建物が倒壊するおそれがある場所、土砂崩れや倒木などで通行不能になる可能性がある場所など

文化や伝統を未来へつなぎ、寺社を活性化させている人や活動。2つの事例を紹介します。

No. I

日本酒も神社も大切な日本の文化。「おいしい御神酒」で新たな層を開拓中

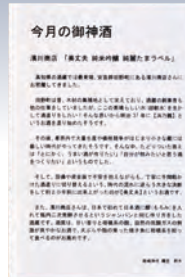
参拝者の声で一念発起
おいしいお酒を出す神社

日本酒は、日本の文化を語るうえで欠かせない。そして神社では御神酒として出されているもの。しかし参拝者の中には「神社でいただく御神酒はどこもおいしくない」と思う人もいるようだ。鈴木伯季禰宜は、かつて奉職していた神社で、参拝者の声を聞いた。その後実家の姫嶋神社で奉職するようになり、全国の蔵元を巡って気に入った地酒を月替わりで「今月の御神酒」と出している。

だから自分も新しいことにチャレンジしたいとの思いが原動力です。現在は年に数回、酒造りの詳細があまり知られていない蔵元を選んで訪問。自分の舌でおいしいと思えた日本酒を選び、御神酒として出す際には味わいと蔵元の紹介文を作成して添えている。始めてから3年あまり、評判はじわじわと広がり、今では自分好みの日本酒を探している人が相談に訪れることも。

「日本酒も神社と同じ大切な日本の文化。お酒の話をつっかかけに、神社という日本の文化も伝えたい」

蔵元を訪ねた際、そこにおいしい梅酒があれば買うようにしている。「もう少し集めて、いつか梅酒のイベントも開催したいですね」。



御神酒の提供時に添える紹介文には、酒蔵がある町の紹介や酒造り、そして味わいなどを書いている

No. 2

丸太の仕入れから納品までに10年以上日本で唯一の寺専用木魚を守る

輸入品にこの音は出せない。
丁寧な手作業が違いを作る

国産材を使う木魚づくりは現在、愛知県だけに残る職人技。中でも愛西市にある市川木魚製造所は、「玉齋」というブランド名で日本で唯一、寺に納める木魚のみを製造する。「我々が作る木魚はお寺専用なので、小さいもので直径30cm、大きなものなら直径90cm以上になります。桶を丸太の状態ですく3年寝かせ、その後、木魚のサイズに断裁。中をくり抜いた状態にしてから3〜5年、大きいものなら7〜10年乾燥させ、そこに彫刻を施していきます」

三代目・市川幸造氏は、この世界に入り34年が経つ。最近では木魚も



市川木魚製造所の作る木魚は、「玉齋」ブランドで知られ、立体的な彫りものが特徴だ。長野の善光寺や福井の永平寺、京都の南禅寺などにも、巨大な木魚が収められている

輸入品が増えつつあるというが、重厚で腹の底に響く国産の音は、「機械では真似できない」と話す。

「仕上げに、切り込みの部分で削りながら音を調整する『音付け』をします。音の善し悪しは削り方次第、長年の経験がものをいう」

音へのこだわりは、「玉齋の木魚は音が違う」とわざわざ工房まで作り方を見学に来る住職もいるほど。同時に、最近では体験学習として地元の中学生らの受け入れも行い、技術を知ってもらおう努力も始めた。

「うちを含め、木魚店はこの辺りにもう5、6店になってしまいました。でも、愛西市には日本で唯一となった技術が残っている。そのことを子供たちに伝えていきたいですね」

日本で唯一の「寺専門」木魚を守る、三代目・市川幸造さん



平面的な名古屋彫りしかなかったこの地に、東京で修行してきた先々が立体的彫りを持ち込み、技術を広めたという。戦後、東京や京都の職人は後継ぎがいなくなり、愛知だけに職人が残った



乾燥室には、中をくり抜いた木魚の土台が小ささまざまな大きさと並ぶ。「10年先の需要を予測して、準備をしなければならぬ」(市川氏)



現在、専用道具を作ってくれる職人もなくなりつつある。細い切り込みを入れるこの巨大ノギリも、数年前に最後の職人が亡くなり、貴重だ

月替わりで御神酒を出す、姫嶋神社の鈴木伯季さん



拜殿脇の菰樽には、日本酒ファンが唸る銘柄も。実は鈴木さん、唎酒師の資格を取得するまではほぼ日本酒を飲んだことがなかった



御神酒は参集殿にて希望者に提供。取り組みを始めて以来、参拝者はかなり増えた



鈴木さんはほかにも新たな取り組みをしていて、帆立貝の貝殻の再利用に繋がれば、と帆立絵馬も始めた

【有限会社 市川木魚製造所】

〒496-0912 愛知県愛西市 (詳細住所、電話番号非公開)

【姫嶋神社】

〒555-0033 大阪府大阪市淀川区姫島 4-14-2 TEL: 06-6471-5230 <http://himejimajinja.wixsite.com/himejimajinja>

石垣地蔵

【いしがきじぞう】



写真左は阿弥陀如来坐像。数列右の石垣にあるのが薬師如来坐像(右)、どちらも経年劣化で少し姿が薄くなってきたが、陽が当たる時間にはくっきり陰影が出る

道行く人々を見守る 阿弥陀如来と薬師如来

大阪府北東部・交野市がある地域は北河内と呼ばれ、戦国時代には畿内平定の要として城が複数築かれた。そのひとつに私部城(さくべ)があり、私部城の山城跡に立つのが光通寺。室町時代の創建で、当時は朝廷へ毎年お茶を献上していたという記録が残る古刹だ。もとは別の場所であり、江戸時代に現在の場所へ移築されたと伝わる。室町時代には京都・石清水八幡宮と領有権を争っていたほどの規模を誇ったが、現在は住宅街の中にひっそりと佇む。

く見ると、そのうちの2つに石仏が彫られているのが分かる。研究者の見立てによると五輪塔の地輪(一番下)のようだが、詳細は定かではない。それほど、いづ、なぜ石垣として採用されたのかも不明。いつの頃からか、すぐ近くに走る山根街道を歩き交う人々に信奉されてきたという。

私部は瓦づくりの里でもあり、小田原城にも私部瓦が使われていた。本堂の鬼瓦は、江戸時代の瓦師の作として現存する貴重なもの



本堂の半鐘は、国立国会図書館に保管されている資料に記載があるもの。その資料を見た人が鐘の音を録音に来ることもある

光通寺にはほかに、鎌倉から江戸時代にかけての仏像や掛け軸、朝廷との関わりを示すものなどが残り、長い歴史の中でいかに大切にされてきたかが分かる。その価値は郷土史家や交野市の教育委員会も貴重な歴史資料だと注目するほどだ。

宮司の秘策・干支づくりが 功を奏して参拝者増へ

新年になると各所で新たな干支が飾られる。しかし岡山市北東部にある御崎宮の干支は、かなり異質。参道脇に飾られているのは高さ1m以上、幅1.5mはあるかという巨大な張り子の干支。これが根石(ねいし)征明(よしまさ)宮司の手づくりだというから、さらに驚く。かつては子供の提灯行列などでも大いに賑わっていた御崎宮だが、根石宮司が奉職し始めた頃にはすでに、地域の人もあまり足を向けない場所になっていた。「神社は人が集まってこそ場所。賑わいを取り戻したい！」

そう考え、自らの厄年を機に干支づくりに着手。初年度はリアルさは



参拝者不足で廃止が検討されていた茅の輪づくりも、根石宮司が茅の輪を手づくりして継続。今では地域の家族が集まる

を追求した。地元のテレビ局などへフアックスで干支の告知をしたところ、ニュースで取り上げられ、見に来てくれる人は増えた。しかし子供たちには怖がられてしまった。：。思案の末、二年目はユーモアスな出来映えを求める方法に転換。するとじわじわと話題になり、参拝者が増えただけでなく、参拝者がSNSで拡散してくれたことをきっかけに県外からも人が来るように。何より、張り子の前で多くの家族が記念撮影をするようになった。時には制作を手伝いたいと連絡してくる人もいるという。

年末が近づくとデザインを考え、年の瀬の一週間で一気に作り上げる巨大張り子の干支。展示も二巡目に突入し、そろそろ新たなコンセプトを考えているという。子供たちが干支を見て笑顔になっている姿が、次回作への何よりの励みだ。



神社のことをもっと知ってもらうため、巫女体験も実施している。定期的にも実施している巫女舞の練習会も好評だそう

張り子の干支

【はりこのえと】

ユーモアが神社の賑わいを取り戻した



おんさきぐう 御崎宮
〒700-0802
岡山県岡山市北区
三野 2-6-14
TEL : 086-222-5175



臨済宗東福寺派
長寿山光通寺
〒576-0052
大阪府交野市私部 5-16-5
TEL : 072-891-2724

特別
インタビュー

パンニヤ・メッタ・サンガ会長、天台宗僧侶

サンガラトナ・法天・マナケ



PROFILE | 1962年インド・ナグプール生まれ。9歳で天台宗総本山比叡山延暦寺に來日留学、1975年に堀澤祖門師の徒弟として得度、1985年には比叡山回峰初百日行を満行。1987年に帰国、禅定林を建立し、住職となる。同年「パンニヤ・メッタ・サンガ」を設立し、会長に就任

9歳で生まれ故郷のインドを離れ来日し、天台宗総本山比叡山延暦寺で24歳まで修行されたサンガラトナ・法天・マナケ師。現在はインド中部の都市・ナグプールにある天台宗海外寺院禅定林を拠点に、大乘仏教の復興のために精力的に活動しながら、学校運営や医療奉仕活動などさまざまな事業にも携わっている。日本の心を持つインド人僧侶として、日本とインドの架け橋的存在でもあるマナケ師は、双方の国の仏教の未来について、どのような考えを持っているのか。
平成30年11月の来日に際して、話を聞いた。

“何が必要か、私に何ができるか”から始めていく。

少年時代から今も 比叡山の教えが根底に

インドの中心部、標高約330メートルの高地にある町、ナグプールで生まれ、9歳で来日しました。1971年6月2日に現地を発ち、比叡山に到着したのが4日。奇しくも伝教大師最澄上人の命日、今思えばこうなるご縁だったのでしよう。9歳と言えはまだインドという国がどんなところかさえ理解できていない年齢です。それから15年を比叡山で過ごしましたので、私にとつ

ての母国は比叡山という感覚です。ですから私の根底にはその頃から今でも、比叡山、そして伝教大師の教えがあります。
24歳の時にインドへ帰国するので

すが、その時はまだ赴任するような感覚、インド仏教のために活動するという意識はありませんでしたが、その実感はまるでありませんでした。現地では、日本で15年も修行をしてきた人という期待感が高かったのですが、本来の母国語であるヒンディー語やマラティ語もわからない。ですから、帰国してから2、3年は振る旗を持っていても振り方が分からない、という状況でした。当時の私はおそらく、日本で得た知識だけでインドを押し量っていたのだと思います。目の前にいる人、町の人の立場や希望ではなく、私は何をしたいかということまで頭がいっぱいだったのです。それで私のやりたいことではなく、民衆が必要としていることを模索するようになりました。

最初に始めたのは子供たちの将来を考え、それに対する日曜学校でしたが、結果的には寺子屋となりました。村の大人の多くは日雇いの労働に従事しています。日曜日で子供たちが休みであっても親は仕事という状況が日常的にあり、子供のそばにいてあげられない不安を払拭するために、禅定林に子供を預けるようになりまし。日曜の朝から夕方ま

日本語で智慧山を意味するブラジュニャ・ギリに1998年、座高10メートルという巨大な釈迦如来座像を建立。インドにおける大乘仏教の聖地として、毎年2月6日には法要が営まれる



で、100人近い、村のほぼすべての子供が禅定林に来ていて、そこでは一緒に遊んだりするだけでなく、衛生の話などもしました。例えばお腹が痛いという子供がいれば、看護師が衛生状態を見て、爪を不衛生にしているからだよ、と改善策を教えてあげる。しかし、その時は言うことを理解していても、翌週会うとまた同じ状態。毎週1回の触れ合い以外、彼らは別の環境で暮らしています。その触れ合う時間の少なさをゆえ、子供たちの成長が思うように見受けられないことに気がきました。それに、運営に協力していただいていた人たちにも負担ばかりが増えていく。そこで運営方法を変え、数人だけ、共同生活のできる子供を預かる形にしました。密接な関係を築く

2007年には禅定林に大本堂が完成。落慶法要には10万人以上が参加するほどだった。右は禅定林大本堂内陣での法要の様子





写真左は「パンニヤ・メッタ子供の家」の様子。さまざまな行事が開催され、子供たちも嬉しそう。右2点は原住部族民居住区巡回医療の様子



「活動する私たちの背中を見て、仏教っていいな、と思ってくれる人が増える。これ以上の喜びはありません」とマナケ師

人の心の根底に響く。 それが宗教の役割。

ことで子供たちもより成長できるのではないかと考えたのです。これが「パンニヤ・メッタ子供の家」の活動の始まりです。最初は男の子4人、女の子3人で始めましたが、今では男女各20人を預かり、これまでに200人以上が巣立っていききました。その後は学校を作り、図書館を作り、これが現在のパンニヤ・メッタ・サンガの中心活動となっています。

活動の根本にあるのは 仏の教えである布施行

25年ほど前のことです。禪定林があるナグプールから南へ400キロほど進んだ原住部族地域に、僧侶として話をしに来てほしいと頼ま

たことがありました。そこで白内障の村人と話をしたのですが、彼は病院へ行くにも森や川を越え40〜50キロ歩く必要があり、一人では無理なのだが誰も同行してくれない、と言いました。目が見えない、病院へ行けば治るとわかっているのに行けない、という肉体と精神両面の苦しみを抱えていたのです。彼のもとには、ラジオがありました。原始的な暮らしの中では、情報が入ってこなければ目が見えなくなることは自然の摂理だと受け入れられたのかも知れません。しかし文明の道具によって、自分が病気であること、そして治ることを知り、苦しんでいたのです。彼に会うまでは、原住部族民居住区に医療など科学的なものを

持ち込んではいけなないと考えていたのですが、このことがきっかけとなり、治療という文明的な手段でその苦しみを取り除けたらと、「原住部族民居住区巡回医療」を始めました。これらは、一般的に見ると社会活動です。しかし私にとつては、形態こそ社会奉仕活動ですが、根本は仏の教えの中にある布施行だと考えています。やってあげているのではなく、やらせてもらっている、ということ

です。ただし、僧侶としての布教活動とは別の活動です。ところで、仏教を含め宗教全般に言えることだと思いますが、実は人が創り出した苦しみに対する解決のアプローチがあります。世の中にはたくさんの苦しみがありますが、それらの多くは人間の気持ちが変わらなければなくなるものでしょう。一方、寿命は誰もが受け入れなければならぬものですが、得た情報による苦しみは、宗教の教えだけでは取り除けません。現代社会には多くの情報が氾濫しています。なかには生きていくうえで不必要な情報も含まれていて、それらは自分が求めているのではなく、どこからか与えられるものです。これが当たり前になって

いる世の中では、より多くの人が苦しい思いをします。ではそこで、宗教には何ができるのでしょうか。上部の喜びだけでなく心の底を揺さぶることを

人間という生き物は、自分の拠り所によって変わっていくと考えています。そう考えると、寺社の存在は、とても重要です。例えば仏教とは、世の中が喜ぶことを説くものではないかもしれませんが、最近では寺社にさまざまなイベントが開催されるようになってきました。それらはあくまで手段であって、参加して楽しんでもらうことが目的になってしまっていると、楽しくなくなればまた寺社へ足を運ぶ人が減ってきます。ですから、人々が生きていくうえでバックボーンになる、精神的な部分へきちんとアプローチしていかねばと考えます。お盆や収穫祭、クリスマスなど、参加することでそれぞれの意味について正しく、深く理解してもらおう。そして、参加した行事が自分にとってどのような存在なのかにも思いを馳せてもらおうのです。さまざまな活動を通して、人の心の奥に意味がしっかりと根付く。人はこうして、

心のぶれない生き方ができるようになっていくのではないのでしょうか。もちろん寺社の存在そのものにも同じことが言えると思います。観光という手段で多くの人が全国の寺社を訪れています。参拝時に、なぜこの寺社が長い歴史の中で続いているのかといった存在意義をきちんと知ることができれば、訪れた人の精神的な部分にきつと作用すると思います。訪れた人の心や魂に影響を与えることができれば、その人の人生を変えていくきっかけにもつながっていくでしょう。

イベントは、確かに寺社に対する親しみを生むきっかけとなります。もともと寺社は、農作業の帰りに寄る、子供が学校帰りに集まるなど日常生活の一部だったわけですから、本来の存在を取り戻し、その先に、心の根本にしっかりと響く内容を伝えていくべきだと思います。例えば手はグーにすれば武器になります。が、合わせれば祈りの気持ちを生み出せます。自分にとって手は何のためにあるのかと考えるきっかけを寺社で得る。インドでも日本でも、我々のいる場所が人々にとって心の拠り所になればと願っています。

大小さまざまな島が点在する対馬。朝鮮半島を望める展望台もある。



宿坊の1階は食堂になっており、朝食はここでいただく。薪ストーブを設えたモダンな和の空間が女性に好評



客室は和室が3部屋、洋室はシングル1室とツイン3室がある。洋室はバス付き

田中住職と奥様の美春さんが切り盛りする。今後は寺務の支障にならない程度に体験プログラムも増やしていきたいそう



西山寺は高台にあり、厳原港が見渡せる。厳原港は、博多と釜山からの高速船が発着する、対馬の海の玄関口



宿坊は本堂とつながっており、希望者には本堂隣の坐禅堂で臨済宗の坐禅を体験してもらう



島で産出される石を積み上げた対馬独特の石垣が美しい、寺への石段



テラハクレポート

昔も今も朝鮮半島とつながりを持ち続ける
国境の島の宿坊

対馬観光の拠点として 寺と町をつなぐ

女性が喜び、町が元気に。
若き住職が思いを込める

室町時代に始まり、江戸時代まで日本に派遣されていた外交使節団「朝鮮通信使」は、釜山から海を渡って日本に入ると、まずは対馬に滞在し、外交僧が駐在して文書を作成していた機関「以酌庵」に立ち寄った。その場所が現在の西山寺の一角と言われているが、西山寺は近年、韓国から最も近い日本文化を体感できる宿坊として人気を集め、わざわざ訪れる人が絶えない。

もとは下宿を営んでおり、昭和

特に韓国からの利用者が伸びている。韓国人女性客は、いまや宿坊利用者全体の4割を超えるほどだ。加えて、平成29年に「朝鮮通信使に関する記録―17世紀―19世紀の日韓間の平和構築と文化交流の歴史」としてユネスコの世界記憶遺産登録が追い風となった。国内でも対馬への関心が高まり、現在では九州はもとより関西、関東からも利用客が訪れるようになってきている。

町へ。宿坊では夕食を提供していないが、歩いて数分の厳原町中心部に新鮮な魚貝など対馬ならではの食を楽しめる店が並んでいる。「希望される方におすすめの店を紹介しています。宿坊を利用された方が町で食事を楽しんでいただければ、町も元気になると思うんです」臨済宗の禅はもちろん、女性が過ごしやすい宿坊という価値観も、もっと高めていきたい。そして利用客が増えたら、それを対馬の活性化につなげていきたい。宿坊を舞台にした地域振興、文化振興への田中住職の思いは、常に町と共にある。

48年からはユースホステルに業態を転換。その後、旅のスタイルが時代と共に変化していくなかで、平成14(2002)年に田中節竜住職が修行から戻ったのを期に宿泊施設を増築、宿坊として運営を始めた。すでに対馬では人口減少が始まっている。それでも「お寺を次代に残していくため」の選択だったという。

「宿坊となったことで、利用者の数はじわじわと増えてきました。なかでも最近では韓国から女子旅で訪れる方も多くなっています」と田中住職。宿がある厳原町には博多と釜山からの高速船が発着する厳原港があり、



対馬藩の船着き場・お船江(左上)や石堀が残る武家屋敷通り(右上)、明治期の旧野良崎灯台(右)など、厳原には歴史的遺産も数多く残る。これらは西山寺からも近い



臨済宗南禅寺派
鶴翼山西山寺
(宿坊 対馬西山寺)
〒817-0022
長崎県対馬市厳原町
国分1453
TEL : 0920-52-0444

宿泊で寺社と地域を元気にする
WEBサービス「テラハク」
http://terahaku.jp
TEL: 06-6356-2090 (株式会社 和空)



感動のそばに、いつも。



人をつなぐ、笑顔をつなぐ。
JTBは地球を舞台に、
あらゆる交流を創造し続けます。



住吉大社(2頁参照)で毎年6月14日に開催される御田植神事は、地域の子供たちも参加を楽しみにしている伝統行事。寺社は地域のつながりも次代へつないでいく

寺社Now

Vol.24

編集後記

「いつ来るかわからない災害のために、今、寺社が変わる時」。特集記事制作に際してお話を伺った方々の心の奥には、このような思いがあった。また、震災後の状況取材するなかで、社会が寺社を求めていることにも気付いた。寺社の存在こそ、社会のつながりの中心にあるべきだと確信。(H)

防災特集で徳島県阿南市新野町を訪ね、お寺の宿坊が地域や自治体とタッグを組み、防災まちづくりの核となっている先進事例を見た(18-19頁参照)。普段は遍路宿で、いざというときには要介護者を受け入れる避難所となる。若い世代がしがらみを超えて前に進む姿に、たしかな未来を感じた。(W)

無料送付の継続希望

「寺社 Now」無料送付の継続をご希望の場合、[寺社名・氏名・住所・電話番号]をご記入のうえ、下記 FAX またはメールアドレス宛にお送りください。ご意見・ご感想もお待ちしております。



バックナンバーが
WEBでご覧いただけます

jisy-now.com

または [寺社NOW](#) [検索](#)

お問合せ

一般社団法人
全国寺社観光協会 本部事務局

TEL : 06-6360-9838 FAX : 06-6360-9848
e-mail : info@jisy-kk.jp

次号は
2019年5月発行の
予定です。

監修
一般社団法人 全日本寺観光連盟

発行人
一般社団法人 全国寺観光協会

編集・制作協力
株式会社 glass

発行所
一般社団法人全国寺観光協会事務
〒530-0044
大阪府大阪市北区東天満 1丁目11番13号
AXIS 南森町ビル 11F
Tel : 06-6360-9838 Fax : 06-6360-9848

寺社 Now
第24号 平成31年3月発行

本誌の表紙、記事、写真、イラストはすべて著作権法で保護されています。発行人の許諾なしに複製(コピー)したり、印刷物やインターネットのWEBサイト、メール等に転載したりすることは違法となります。



挑戦の 数だけ、 保険が ある。

保険は、冒険から生まれた。
大航海という挑戦を助けるために、
勇気をつくるために、
保険は生まれた。

さあ、挑戦しよう。
人は何かを始めることで前へ進み、
世界は新しく変わってゆく。
不安も、きっとあるだろう。
でもそれは、分かち合うことで軽くなる。

世の中には2種類の人がいる。
挑戦する人、しない人。
充実した人生を送るのは、
どちらの人だろう。
人から愛され尊敬されるのは、
どちらの人だろう。
世の中を変えていくのは、
どちらの人だろう。

私たちはすべての挑戦を応援します。

To Be a Good Company
東京海上日動



JOCゴールドパートナー(損害保険)